



保育の実践研究について考える

榎田 正子

昨秋、日本保育学会の会報に「実践者の立場から現場研究を考える」という一文を書かせていただいた。自分たちの現場での研究のあり方を模索していた時で、日々の保育実践をこんな風に研究に取り上げて行くことができればという期待を四点挙げたものである。その後ありがたいことに、それを読んでくださった大学の先生から、研究者としての貴重な御意見をいただくことができた。また、我が園の実践研究は、未だ手探り状態ながらも少しずつ方向を見出しつつある。このような状況にある今、実践者が取り組む現場研究のあり方について、もう一度考えてみたいと思う。

まず、実践者にとって実践研究とは、と考えてみたい。保育の現場では、まだまだ“研究”ということに対して何となく構えてしまう雰囲気がある。毎日の保育とは違うもの、かけ離れたもの、とつつきにくいもの、といった印象があるのかもしれない。しかし、実

実践者にとって保育実践は、それ自体研究的な要素から成る営みである。一人一人の子どもの思いを汲みとり状況を受けとめ、それに基づいて子どもと関わっていく。そして、それで良かったのか、もっと別のとらえ方、別の対応をしたら何が変わっていたか等、検討や試みをくり返し、それぞれの子どもが十分に自己を発揮して豊かな体験の中でふさわしい成長・発達が遂げられるように、子どもとの生活を創造していくのである。このような保育の流れとそこに生まれる問題意識、検討、工夫など、実践の営みそのものを保育研究として組み立てて行くとすれば、その研究は日々の保育活動と深く結びつき、より充実した保育を実現する方向で実践者を生き生きとさせるものになるのではないだろうか。一方、もしも実践者が日々の保育活動との接点をとらえにくい研究に取り組まざるを得ないとしたら、その状況は実践者に過大な負担感を抱かせ、保育に影響を及ぼすことにもなりかねない。実践者にとって、保育研究と保育実践の関連性はひとつの大きな要素であろう。

私共の現場では、研究のためのテーマを先に決めるのではなく、保育者がそれぞれの具体的な問題意識や悩みを持ち寄り話し合いを重ねることを重視し、保育者の必要感に根ざした保育研究が生まれることを期待している。

次に、保育の流れを実践研究として取り上げる際に、実践者自身の内面を有効な形で資料に生かすことの必要性を提案したい。

保育の日常にあっては、こうしたい、こうすることが良いだろうと思いつながら思い通



りに行かない場合がしばしばである。そうかと思うと、フツとした気づきから今までわからなかった子どもからのサインが受けとめられるようになっていたり、子どもとの間を隔てていたものが突然無くなったように感じ子どもと同じ側に立っている感覚を体験することもある。前者の場面は保育の中で生起する躊躇、葛藤、不自由感など実践者の揺れとも言うべき部分であり、後者は実践者の育ちとも言えるかもしれない。このような実践者の「揺れ」や「育ち」を丁寧に取り上げ、何が揺れの奥にあるのか、育ちをもたらすものは何なのかを検討することによって、時に保育実践を硬くしている「保育者のとらわれ」を探り、更にはとらわれからの脱出を助けることに役立つのではないだろうか。但し、ここで挙げている「揺れ」や「育ち」は極くあいまいな感覚であるから、実践者はそれを敢えて問題視して表現しようとする視点と勇気が要ることではある。しかし、実践者が自らの専門性を基盤としながら、自由感をもって子どもと関わることで保育実践において非常に大切なことであると考え、また実践研究の今後を考える時、今ここで一步を踏み出したいと思う。

第三には、研究資料について考える。実践者が取り組む現場研究として考える立場からすると、前述の実践者の内面を含めた実践者自身の記録は欠かせないものである。従来は研究資料としての実践記録というと、客観性に強くこだわる傾向があった。今は、実践者が自らの視点で保育のありのままを研究資料として表現するにはどうしたらよいのか、固

定観念にとらわれない柔軟な姿勢で工夫する時であろう。

また、研究の視点にもよるが、実践場面の記録にとどまらず、保育の実践に大きく関与するものがある場合にはそれ等の記録も、併行的な資料として検討することになる。私共の園での取り組みから言えば、実践者自身の気づきや保育に対する検討は実際の保育場面でも見られるが、保育を支える目的で継続的に行っている保育の話しあい（保育カンファランス）の場でも多く見られるので、この話し合いの記録も重要な資料と考えている。

第四には研究における協力体制の重要性を指摘したい。すなわち、実践を理解した上で、当事者でない視点から保育場面を検討できる人と実践者との対等な協力体制は、広い視野で保育や研究の姿勢等について検討することが可能であり、現場研究にとって非常に望ましいものである。この点については、研究的立場にある方から、「実践を理解していること」、「対等であること」をいかに実現するかが大事であり、実践者と研究者の双方の立場の理解と歩み寄り、互いに反論や疑問やコメントを出すことが許されるような雰囲気作りが重要であるとの具体的な指摘をいただいた。研究者と保育者ばかりでなく、異なる立場の者が協同でひとつのことに取り組む場合、お互いがそれぞれの立場を尊重しつつ、同時に自らの立場が無意識のうちにつけてしまっているガードを開いて関わって初めて、お互いを生かした成果が生み出されるのであろう。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）